

インプットとアウトプットに 生きる哲学思考

読書を自分のものにするには、しっかりと頭を使って考えなければなりません。読みながら頭をフル回転させるわけです。しかも、アウトプットを念頭においた読書の場合、ただ内容を理解すればいいというものではありません。それをどう料理するか考えながら、あるいは前にも書いたように、プレアウトプットとして下ごしらえをしながら読まなければならないのです。

ここで哲学の思考法が役に立ちます。哲学は思考を目的とした学問であり、物事の本質を探究するために数々の思考法が生み出されてきました。ここではその中から読書のインプットとアウトプットのために不可欠なものを5つ厳選して紹介したいと思います。①直観、②構造主義、③批判、④脱構築、⑤弁証法の5つです。

この章では、具体的に数冊の本を例に挙げながら、どのように各々の思考法を使えばいいのかお示ししていきます。もちろん哲学の予備知識は不要です。一から解説しますので、ご安心ください。

思考法①「直観」

直観というのは、簡単に言うと思考する前に感じることでいいでしょう。なぜまず直観なのかというと、なんでもフーリングが大事だからです。もしかしたら、本を読む前からすでにこの直観を働かせる必要があるのかもしれない。そもそも本を手取る行為は優れて直観的なものです。

そして本を読み始めてからも、**まずは直観を働かせて内容をざっと把握することが大事**なのです。アウトプットに関しても、やはり直観的に構成をイメージすることが求められます。

このように直観は知的作業の第一歩だと言っていいでしょう。直観についてももう少しだけ詳しく説明しておきたいと思います。直観というのは、認識の一つです。たと